

---

# 河童戦記～天狗の章～

万墨人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

河童戦記〜天狗の章〜

### 【Nコード】

N9359N

### 【作者名】

万墨人

### 【あらすじ】

河童戦記第三部。河童淵を旅立った時太郎は、お花と共に、天狗が住まう苦楽魔へと足を向ける。水虎の予言によれば、苦楽魔で時太郎は仲間を見つけるという。さて、苦楽魔の仲間とは何者か？これからの時太郎の冒険はいかなる顛末を迎えるのか？

## 川岸

ちよろちよとした小川はやがて水量を増し、水飛沫を撥ね上げる急流となった。

いくつかの川が一つに集合し、川は渓谷を形作り、いかにも天狗が住まう秘境、といった趣になる。深く切れ込んだ谷は昼間でも辺りを薄暗く隠し、上流から流れてきたらしい大石は複雑な流れを作り出している。

しかし時太郎とお花はその大石をひよいひよいと跳び越え、平地を行くのと同じように伝っていく。お花のほうが軽々と跳び越えているのに対し、時太郎はやや不器用な歩みをしているくらいだ。

もし普通の人間が同じ旅程を辿ったとしたら、二人に追いつくなど、まるで不可能と思える。

時太郎は急流をじっと睨んでいる。

と、さつとその手が動いて、手にぴちぴちと跳ねる魚を鷲づかみにしていた。それをお花に放り投げ、もう一匹を掴んだ。

二人とも立ったまま頭から齧って、むしゃむしゃと平らげる。二人にとって山の中は食料に溢れている。

魚もそうだが、山に入れば木の実や、さまざまな虫などが手に入る。特に旨いのが、この時季、溢れるように木の枝をのそのそと這っている芋虫のたぐいである。頭をぶちりと噛み切り、とろりとした中身を嚼るのは、こたえられない。

食べ終わると時太郎とお花は川に屈みこみ、両手で水を掬って口

をゆすいだ。

立ち上がると、どちらともなく「うん」と頷きあつて歩き出す。

「苦<sup>く</sup>楽<sup>ら</sup>魔<sup>ま</sup>つて、まだかしら？」

ぼつりとお花が口にしたのを受け、時太郎は指を拳げ答えた。

「もう、着いてる」

## 天狗

「えっ？」と意外そうに、お花は顔を上げて時太郎の指差した方向を見る。「ああ」と頷いた。

「確かに、天狗の住んでいるところね！」

お花の見上げた方向に、巨大な岩が聳えている。その天辺に、高々と隆起した鼻、ぐつと食い縛った大口の天狗の顔が刻み込まれていた。

その天狗の顔を見て、時太郎は即座に「水虎さまの方向を見ているな」と思った。天狗の視線は水虎さまと同じ高さにあつて、真つすぐ彼方の向かい合う方向を睨んでいるようだった。

天狗の顔が彫りこまれた岩には階段が刻まれている。階段の先には岩棚があり、登った先には、驚くほど大きな鳥居があつた。

時太郎とお花は階段を登つて鳥居へと向かつた。

登りきつた先に、岩を背に壮麗な御殿が建てられてあつた。

白木の柱にぴかぴかに光る白壁。屋根はひわだふき桧皮葺、地面には真つ白な玉砂利が敷き詰められ、清潔で塵一つすらも落ちていない。

足を踏み入れた二人に、不意に声が掛けられた。

「止まれ！ その先に行つてはならぬ！」

声の方向を見ると、そこに天狗がいた。

見るからに天狗である。

真つ赤な顔にぐいつと突き出た鼻。ぐつと食い縛った大口。髪の毛

毛は真つ黒で、肩にはらりと垂れている。背中には大きな羽根がついていた。

額に頭襟ときんの山伏の装束で、一本歯の下駄を履き、右手には六尺棒を掴み、左手には葉団扇を持っていた。

## 通行手形

お花は、につこりと笑顔になり、話しかけた。

「あ、あの……天狗さんですよね？」

天狗は頷いた。

「いかにも、わしは天狗である！　それで、そのほうらは？」

時太郎が口を開いた。

「おれ、時太郎。河童淵の時太郎」

ぶつきら棒な時太郎の口調に、天狗はむっとなったようだ。

慌てて、お花が前へ出た。

「あたし、お花って言うんです！　ご免なさい、河童たちって、あんまり挨拶に慣れていないんです……」

天狗は微動だにしない。お花は小首をかしげた。

「あのう……。怒ってます？」

ふん、と天狗は顔を上げた。

「そのような些末なことで腹を立てるような天狗ではない！　その  
ほうら、ここが天狗の住まいである苦楽魔だと、知っておるのか？」

二人は頷いた。天狗は続けた。

「つまりは、この苦楽魔に用件がある、ということであるな？　で  
は、通行手形と査証<sup>パスポート</sup>を見せなさい」

葉団扇を帯にさし、空いた手を差し出した。時太郎とお花は、きよ  
よと顔を見合わせた。

「通行手形と査証って、なんだい？」

時太郎の問いかけに、天狗は呆れたように眉を上げた。

「おい、まさか通行手形や査証を持たずに、この苦楽魔に入国しようとしているのか？」

時太郎は苛々と足踏みした。

「そんなの、知らねえよ！」

天狗は明らかに衝撃を受けたようであった。首を振り、呟く。

「まさか、手形も査証も持たずに苦楽魔にやってくる図々しい者がいようとは……」

とん、と六尺棒を地面に突いて口を開く。

「通行手形と査証を所持せぬ者は、ここを通すわけにはいかぬ！  
早々に立ち去りなされ！」



## 間者

なにいつ、と身構えた時太郎の頭上から「ばさばさばさ」という羽音が聞こえてきた。

振り仰ぐと、空から数人の天狗が羽根を広げて降りてくる所である。

天狗たちは「ばさっ！」と大きく羽根をうち広げて速度を落とし、すっと一本歯の下駄で降り立った。

みな、そっくり同じ顔をしている。

高々と隆起した鼻。ぐいっと持ち上げられた濃い眉。食い縛った大口。一様に、顔色は真っ赤である。

その一人が口を開いた。

「どうした、何を揉めておる？」

最初に出てきた天狗が答える。

「この者ども、苦楽魔に入国したいそうなのだが、通行手形と査証を、持っていないそうなのじゃ！」

「なにいつ！」

「通行手形と査証を」

「持っておらぬだと？」

次々に口に出して、驚愕の表情になる。べちゃべちゃと口騒がしく顔を突き合わせ言い合う。

「驚くべきことだ！ かつて、このような事態があるのか？」

「ないない！ まさか、通行手形と査証を持たずに入国しようとする

る不届き者がいようとは、想像すらできぬわ!」

「これは、重大なことじゃな?」

「うむ、もしかしたらこやつら、わが苦楽魔を攻め寄せようとする人間どもらが寄越した間者<sup>スパイ</sup>かもしれぬな!」

## 紐

「間者！」

その言葉を口にした天狗たちは、さつと時太郎とお花を睨んだ。

「そうじゃ、間者じゃ！　そうに違いない。これ、お前たち、この領内の間者じゃ？　有体に申せ！」

時太郎は叫んだ。

「だから、おれたち、知らねえって言ってるんだろ？」  
無視して歩き出す。

「とにかく、ここを通らせてもらうからな！」

「時太郎……！」

お花が時太郎を止めようと追いかけた。

「待ていつ！」

天狗が装束の紐を取り出し、ぱつと空中に放った。紐は空中でほだけ、ひとりでに時太郎とお花に絡まった。

「わっ！」と時太郎とお花は絡まった紐をほど解こうと抗った。ところが、どういう訳か、紐は容赦なく、ぐいぐいと締め付け、手足を縛っていく。

放った天狗が高々と叫んだ。

「それは、天狗の螺緒かいのおというものじゃ！　どんな強力けつりの者でも、外せるものではないぞ！　それ、暴れれば暴れるだけ締め付ける。諦めて我らに従えばよし、逆らうと、さらに締め付けるわい！」

お花は時太郎に囁いた。

「時太郎、ここは我慢しよう！　ね、暴れるのはやめて！」  
時太郎は力を抜いた。口惜しさに唇を噛みしめる。

天狗は螺緒の端をぐいつ、と引いた。

「それでよい！　さ、こちらへ参れ。これより、そのほうらの裁きをいたす」

時太郎とお花は引き立てられ、御殿へと向かった。

## 騒音

建物の中に入ると、けたたましい騒音が耳を打つ。

がちゃがちゃ、ばたばたという連続音が、ひっきりなしに部屋を満たしていた。

広大な床に、見渡す限り床机しよこが並び、その前に百人を越す天狗が座って、なにかの機械キを操作している。

機械には無数の打鍵キが並び、天狗は忙しげに、打鍵を叩いている。かちやかちやと打鍵を打つと、機械からは紙が吐き出される。

タイプライター  
文字打出鍵盤なのだ。

時太郎とお花を引き立てた天狗は、その床机の一つに二人を連れて行った。目にも止まらぬ速さで打鍵を打ちまくっている天狗に声を掛ける。

「おい！ ちよつと……恃たのむ！」

かちやかちやかちや、と打鍵をひとしきり打って、その天狗は顔を上げた。鼻にはちよこんと眼鏡を掛けている。その眼鏡を直し、上目遣いになった。

「はい、何か？」

両手を組み合わせた。

紐を握る天狗は口を開いた。

「こやつら、もしかしたら他国の間者かもしれぬ。急ぎ取り調べをしたいので、申請をしたいのだ」

「間者！ それはまた、容易なりませぬ話でございますな！」

眼鏡の天狗は大仰に驚いて見せた。

「それでは申請書類として、被疑者の通行手形と査証<sup>ビザ</sup>を拝借いたしたい」

「それが二人とも、持っておらぬと申すのだ」

## 静寂

「なっ、なんと！」

ふたたび眼鏡の天狗は驚きの表情を見せた

「持つておらぬ、と仰せで。それで、この苦楽魔の結界にやってきたとは、なんと大胆不敵、傲岸不遜、面張牛皮！めんぢょうぎゅうひ まさに、一大事にございますな。よろしゅうございます、それでは、その薄桃色の書類に必要な事項を記入して、写しを三通作成してください。それが終わったら、三番の窓口に出頭して、ここここに認可印を押していただきます。あと、七番と十二番の窓口で必要事項を記入して……」

「おいおい！」

紐を握った天狗は呆れた。

「そんな面倒な手続き、必要なのか？ 先週までは、もつと簡単だったぞ！」

「申し訳ございませんが、つい先週、窓口業務の改善がなされました、必要な書類の数が増えました」

時太郎は我慢の限界だった。

「おいっ！ おれたちの話を聞けよっ！」

時太郎の声は部屋の中で響き渡った。

ぴた、とそれまで引つきりなしに立てられていた打鍵を打つ音がやんだ。天狗たちは驚きの表情を浮かべ、時太郎を注目している。

「おれは、河童淵からきた時太郎！ 水虎さまの？お告げ？でこの苦楽魔にやってくることになったんだ！ それなのに、いきなり縄を掛けるなんて、ひどいじゃないか！」

しーんとした静寂が支配している。



## 盟友

ようやく、一人の天狗が立ち上がった。

「その小僧、河童淵の水虎、とか言わなかったか？」

「水虎？」という言葉が天狗たちの間で囁かれた。

「はて、どこかで聞いた覚えがあるような……」

紐を握った天狗が首を捻る。目を見開く。

「ああっ！ お前たち、ひょっとして、あの河童淵から来たのか？」

お花は、ぷうつ、と河豚のように脹れた。

「だから、最初から言ってるじゃない！ あたしたちは、河童淵の河童だって！ 河童と天狗は、盟友の誼よしみを通じているんじゃないの？」

「す、すまん！ 査証免除特約を結んでおる河童淵の者と判れば……」

そそくさと二人を縛っていた紐を解いて、帯にしまいこんだ。時太郎とお花は締め付けられていた腕を擦った。  
が、天狗は、しげしげと時太郎を見つめた。

「そっちの娘はどうやら河童らしいな。背中に小さいが甲羅を持つ。しかし、そちらの小僧だが……」

上から下まで、じろじろと不躰に観察した。

「さて、頭の皿もないし、手には水掻きがない。河童だという証拠はあるのか？」

「おれの父さんは三郎太！ れっきとした河童だぞ。だから、おれは河童だ！」

「三郎太？ 河童の三郎太……。むう！ その名前も聞いた覚えがあるな？」

首を捻る。

時太郎は三郎太が旅の前、天狗を訪ねたと言っていたことを思い出した。

「父さんは、おれの生まれる前に、苦楽魔に来たと言っていた」

「んー……」と唸って天狗はくると背を向けた。

振り返り、時太郎とお花に声を掛ける。

「従いてまいれ。調べてみよう！」

## 烏天狗

部屋を出て、天狗は長々と伸びた廊下に二人を案内した。廊下の片側にはいくつも小部屋が並び、各小部屋では、床机の前に座った天狗がなにやら忙しげに書類を作成している。どの床机にも文字打出鍵盤が置かれ、天狗は目まぐるしく指を動かして打鍵を叩いていた。

廊下には小部屋から溢れ出た書類が散乱し、ひっきりなしに書類の束を抱えた天狗が行き来していた。

「ここで何やってんだい？」

時太郎は思わず案内してくれる天狗に質問した。質問された天狗は、思いもかけないことを訊ねるものと眉を上げた。

「何をつて、書類を作っているに決まっておろう？」

「何の書類なんだ？」

「あらゆることだ！　すべて我らが何事かすべきとなると、書類を作成しなくてはならぬ！　漫然と、ただこうしよう、とするだけでは何事も効率的に動かんからな。効率だ！　協力だ！　そのために、こうして書類仕事が必要なのだ」

自慢げに言う天狗に、時太郎とお花は首をかしげた。なんだか、ひどく間違っているような気がする。

父さんが「天狗は変わっている」と言ってたのは、これが、と密かに時太郎は頷いた。

天狗は廊下を何度か曲がって、一つの部屋に案内した。部屋の壁一面には、奇妙な機械が据えつけられていた。細い導線

が巻きついた、小さな輪が無数に並べられ、それらは細かく震動して「ざーっ」という雨音のような音を立てている。

部屋には一人の天狗……口が烏の嘴になっている烏天狗が作業していた。

大きな、度の強い眼鏡を掛け、舐めるように機械の様子を見守っている。天狗にしてはひどく太っている代謝症候群メタボリック体型だ。ふっくらとした指で、いと愛おしむようにして機械の調子を試している。

## 記録

烏天狗は、時太郎たちが入ってきたのに気付き、眼鏡をずらして「なんでしよう？」と口を開いた。背が低く、時太郎の胸ほどしか背丈はなかった。

「翔一！ 河童の三郎太という名前を調べてもらいたい。十何年前、この苦楽魔に立ち寄ったと申しておるのだが、記録は残っているかな？」

「三郎太……はあ、少しお待ちを……」

翔一と呼ばれた烏天狗は、頭を下げると、ちょこちょこ部屋の隅に歩いていく。

そこにも文字打出鍵盤が置かれ、翔一はその前に座ると、打鍵をかちやかちやと打ち出した。

途端に壁の機械から「ざーっ、ざーっ」という音が聞こえてきた。時太郎が壁に近づいて見ると、爪先より小さな輪っかがぶるぶると震えているのが見える。

二人を連れてきた天狗が説明した。

「これは電磁誘導磁界素子パラメトロンというものだ。これまで作成されたあらゆる記録がこの機械に収められておる。今、翔一が行っているのは、三郎太という名前の河童がいつ、この苦楽魔に立ち寄ったかを機械に質問しているところなのだ」

説明している間に、文字打出鍵盤が一枚の紙を吐き出した。それをびりつと破いて、翔一が天狗に渡した。天狗はその紙に目を走ら

せ、  
頷いた。

## 疑惑

「なるほど……確かに十数年前、三郎太という河童が訪ねてきているな。その河童が、お前の父親だと申すのか？」

「そうだ！」と時太郎は胸を張った。

天狗は質問を重ねた。

「で、母親は？」

「人間だ。京の信太従三位の娘、時子っていうんだ」

「人間の女？」

天狗は素っ頓狂な大声を上げた。

「お前は、ひょっとして、人間の女と河童の男の間に生まれた、とても主張するのか？」

時太郎が頷くと、天狗はいきなり笑い出した。

さすがに時太郎は、むっとなった。

「何が可笑しい？」

「馬鹿なことを……人間と河童の間に子供が生まれるなど……金輪際ありえぬ！」

「なんでだ？ おれは現に、ここにいますぞ！」

天狗は哀れむような目付きになった。

「あまりに種が違いすぎる。人間と河童は似てはいるが、まったく違う種なのだ。犬と猫の間に子供が生まれないのと同じだ。お前は騙されているのだ」

「そんな……」と、時太郎は声も無く口を動かしていた。天狗の言

葉は、時太郎の足下を突き崩すものだった。

「間違いない。お前の父親は人間だ。おそらく、三郎太という河童は、お前を自分の子供として育てたのだろうが、産みの親ということとは断固ありえぬな。他に人間の男で、お前の父親となりうる人物に心当たりはないのか？」

源二、という名前が時太郎の心に浮かんだ。

三郎太が言っていた、最後まで自分と母親の時姫を守って死んだと言っ男の名前である。

しかし、そんな、まさか……。

おれの父親は……三郎太ではないのか？

時太郎は茫然と虚脱し、立ち尽くしていた。



## 目的

お花は、そつと時太郎の袖を掴んだ。

時太郎がそちらを見ると、お花は目に一杯の涙を溜めている。微かにかぶりを振ってこう言っているようだ。

（大丈夫、あたし、あんたを信じてる。あんたは立派な河童淵の河童だわ！）

時太郎はお花の目を見つめ返した。

その時、天狗が「おほん！」と、わざとらしい咳払いをした。

「さて、そう言えば、まだおぬしたちの苦楽魔に來た目的というのを聞いてはいないようだが……水虎とやらの？お告げ？とは、どういうことかな？」

時太郎は、ぐい、と頭を上げて胸を張った。もう、心はすっかり平静を取り戻している。

「おれは、母さんを探しに行かなければならない。母さんは京の都にいるらしい。そのために、仲間が必要なんだ。水虎さまは、この苦楽魔で仲間を探せと、おれに言ったんだ」

「ふうむ……仲間を、のう……！しかし、誰がお前の仲間になるのだ？水虎さまとやは、この苦楽魔におる誰がお前の仲間になるか、言つてはおらんのか？」

時太郎は頷いた。

「ああ、そんなことは、ひと言も……。でも、水虎さまの？お告げ？だ。苦楽魔へくれば、判ると思つてた……」

天狗は困つたように黙り込んだ。

静寂が支配したその時、それまで一人だけ機械にへばりついていた翔一が、おずおずと口を開いた。

「あのう……大天狗さまにお尋ねになったら、いかがでしょうか？」

お願い

天狗が息を呑んだ。

「大天狗さま！ うーむ……！ 確かに、こういった難問には、大天狗さまの裁定が必要かもしれんな！」

時太郎が興味津々で訊ねる。

「大天狗さまって？」

「我ら天狗一族の長である。なにしろ、百年以上も生きておられ、我らを常に導いて下さる、偉い天狗さまなのだ！」

時太郎は、河童淵の長老さまのようなものと理解した。それなら判る。

天狗は翔一に話しかけた。

「翔一！ お前、大天狗さまのご予定は判るか？ 今週の行動予定は記憶装置に入っているはずだな？」

「少々お待ちを」と返事をする、翔一は再び文字打出鍵盤に向かい合った。素早く打鍵を打つと、すぐに紙が吐き出される。

眼鏡を直して、翔一は紙片の文面を読んで、振り返った。

「大天狗さまは今日一日、天儀台フラネタリウムにおられるようです」

「天儀台か……よし、二人とも、わしに従いてまいれ！」  
背中を見せる天狗に向かって、翔一は慌てて声を掛けた。

「あのう……わたしも一緒に連れて行ってくださいませんか？」

「ん？」と天狗は翔一を見て、怪訝そうに眉を上げた。

「なぜじゃ？ おぬし、大天狗さまに何か用があるのか？」

翔一は顔を俯け、もじもじとしている。

「はい…… ちょっとお願いしたいことがありますので……」

「ふうん」と天狗は頷く。

「まあ、いいだろう、しかし、あまりしゃしゃり出るでないぞ！  
判っておるな？」

翔一は頭を下げた。

天狗は時太郎とお花に命令した。

「さあ、行くぞ！ 従いてこい！」

## 天儀台

廊下の突き当たりに一枚の引き戸があり、その両側に天狗が立っている。引き戸の側には巨大な木製の歯車が設置されていた。

三人を連れてきた天狗は、立っている二人に声を掛けた。

「天儀台だ！ 大天狗さまに会いに行く」

両側に立っていた天狗は、その言葉に頷くと引き戸を開けた。引き戸を開けると、中は小部屋になっている。四人が入ると一杯である。

「やってくれ！」

天狗がひと声、甲高く叫ぶと、そこにいた二人の天狗は歯車に取り付いた。

歯車には手を掛ける場所があり、二人の天狗が力を込めると、ぎりぎりぎりと言を立て、歯車は回り出した。

同時に、四人の入った小部屋が上昇を始めた。

時太郎とお花はこの動きを予想していなかったので、部屋が上昇し始めるときよっとして、おたがいにしがみついた。それを見て天狗は、にやりと笑った。

「心配するな。ただの昇降機だ。<sup>エレベーター</sup>これは天儀台に直行する」

ごとごとと暫く小部屋は上昇を続けた。

やがて、がったん！と言を立て停止すると、そこには星空が広

が  
っ  
て  
い  
る。

## 大天狗

あれ？ いつの間に夜になったのか、と良く見ると、星空は半球形の屋根の内側に映し出されたものであった。

時太郎は昇降機の小部屋から一步、踏み出した。

部屋の真ん中には、見るからに複雑そうな装置が、でん、と置かれている。

幾つもの金属の輪がぎっしりと組み合わされ、輪には同じく金属の球が嵌め込まれている。見ているうち、輪はゆっくりと回転しているようだった。輪は一つ一つ別々の速度で回っている。

「これは、何だい……」

恐る恐る時太郎は輪に指を触れた。すべすべした金属の輪はひやりとした感触を伝えてくる。輪に嵌め込まれた球体が近づいてきた。

球体にはさらに小さな球体が棒で繋がれている。小さな球体は二つあり、一つは小さく青く塗られ、もう一つは少し大きく、赤く塗られている。二つの球は輪に嵌まった球の周りを、ゆっくりと回っていた。

「それは、この世界を表しておる……」

不意に部屋の中に重々しい声が響いた。

声と同時に部屋の壁の片隅が開き、外光が差し込んできた。半球形の屋根に映し出されていた星空は、瞬時に消えた。

ぎよつとして顔を上げると、そこに大天狗が立っていた。

まさに、大天狗だった。身長は七、八尺は優にありそうで、広々とした半球形の部屋が、そこに立っている大天狗一人のせいで、急に狭くなったようだった。

身に着けている装束や顔かたちは、他の天狗と同じだが、遙かに巨大だ。

さらに大きな違いは、大天狗の髪の毛が、雪のように真っ白になっているところだった。

ふさふさとした、真っ白な眉毛の下から大天狗は、じっと時太郎を見つめていた。

大天狗の威圧するような目に、じーっと見つめられ、時太郎はなぜか落ち着かない気分になった。



## 威圧

大天狗は頷くと、口を開いた。

「お前が、河童淵からまいった時太郎であるか？」

「えっ？」

時太郎は驚いた。なぜ、この大天狗が自分の名前を知っているのだろうか？

ゆっくりと大天狗は歩み寄った。

「この苦楽魔と河童淵は、昔から深い縁えにしに繋がっている。河童淵の水虎から、お前のことについて宜しく頼むとあったので、待つておったのだ。よく来たな、歓迎するぞ」

大天狗は開いた窓を指し示した。その方向を見た時太郎は「あ」と驚きの声を上げた。

窓の外に岩が突き出している。鼻の形をしている。つまり最初に見た、天狗の顔を刻んだ岩の目の所に開けられた窓なのだ。

しかも、窓から真つ直ぐ視線が伸びた先には、水虎さまの像が遙かに見えているではないか。

大天狗は時太郎が見入っていた機械を指さした。

「その輪に載っている球一つ一つが、我々が今いる世界全体を現している。お前の前を通っていく球は、我らが住んでいる世界そのものなのだ。二つの小さな球は、紅月、藍月を表しているのだ」

お花は「ぷっ」と噴き出した。

「まさかあ！　こんな真ん丸の球に、あたしたちがいるなんて、信じられないわ！　つるつるの球に立ってられないでしょ。下に落ちちゃう……」

天狗は、ゆるゆると首を振った。

「違うのだ。我らが立っているこの球は、物凄く大きく、しかも総てのもの引き付ける力が働いておる。球の上にいる者も、下にいる者も今いるところが上だと思っておるから、落ちないのだ」

お花は納得しないのか、首をかしげている。

天狗は、にいつと笑いの表情を作った。

「まあ、それは、どうでもよい。時太郎、おぬしは京の都で母親を探すという使命があるのだろうか？」

時太郎は一步、大天狗に近づいた。

「うん！　この苦楽魔で仲間を探せ、と言われたんだ」

大天狗はちら、と時太郎の背後に控えている翔一を見た。

翔一は大天狗の姿に圧倒されているのか、がたがたと足を震わせている。

## 葉団扇

「その者は？」

翔一の隣に立っていた天狗が口を開いた。

「この烏天狗、なにやら大天狗さまに申し上げたい儀があるらしく、連れてまいりました」

天狗は翔一の肩を、ばしんと叩いた。

叩かれ、翔一は勢いで一歩二歩、つんのめって前へ進む。言い出しかねているのか、胸の前で両手を捻くり、ぱくぱくと口を開いたり閉じたりしている。

天狗は声を掛けた。

「さ、ここまで来たのじゃ。大天狗さまにお願いしたい儀があれば、申し上げよ！」

翔一は背後を振り返り、今にも泣き出しそうな情けない顔になる。大天狗はじつと翔一を見下ろしている。それに気付き、翔一は俯いてしまった。

すかさず大天狗が声を掛けた。

「願いの儀とは、なんじゃ？ 話せ！」

大天狗の厳しい声に、翔一は飛び上がった。

顔を真っ赤にさせ、途切れ途切れに口を動かす。

「お、おれ……いや、わたくし……烏天狗の翔一と申します……！  
あ、あの、おれ……ずっと苦楽魔で機械の係りを仰せつかってお

りますが……その……」

大天狗は黙って待っている。

大きく息を吸い込み、翔一は思い切ったように叫んだ。

「おれ、まだ葉団扇を頂いておりません！　いつになったら、頂けるのでしょうか？　おれと同じ時期に烏天狗になった仲間はおれがいつまで経っても葉団扇を貰えないので、さんざん馬鹿にしております！　やれ半人前だとか、烏天狗じゃなくて雀天狗だとか……」

お花は、ここに連れてきてくれた天狗に、そつと話しかけた。

「葉団扇が貰えないことが、どうしてそんなに大事なの？」

「葉団扇がないと、我らは空を飛ぶことができぬのじゃ！　じゃから、あの翔一という烏天狗は、必死なのじゃ」

意外な答にお花は「へええ」と驚きの声を上げた。時太郎も、天狗が葉団扇がないと空を飛べないということは初耳だった。

## 半人前

大天狗は微かに頷いて見せた。

「おぬしのこととは耳にしておる。なぜ、おぬしが葉団扇を貰えないのか、その訳を承知しておるかな？」

翔一は、ぽかんと阿呆のように口を開けた。大天狗の質問は予想もしないものだった。

「わ……訳でございますか？」

さっぱり判らない、と首を振る。

大天狗は、溜息をついた。

「しかたないな……では教えて進ぜる。その前に葉団扇を渡そう……」

大天狗の言葉に翔一は、ぱつと顔を輝かせた。

が、大天狗が差し出した葉団扇に、その顔が曇った。

大天狗が差し出したのは、確かに葉団扇の形をしているが、楓の葉ほどしかない、翔一の手の平ほどの大きさの葉団扇だった。

「あ、あのう……これが？」

「葉団扇じゃ！ 使って見ろ！」

「は、はい……」

翔一は葉団扇を手に持ち、背中の羽根をぱたと動かした。動かない。全然ぴくりとも浮かない。

さらに必死になって、背中の羽根を早く動かす。

たちまち翔一の顔から、汗が滝のような勢いで噴き出てきた。

「お！」と時太郎たちは目を見張った。

一瞬、翔一の足が微妙に浮いたような……。しかし、がっくりと疲れ果て、翔一は肩を落とした。恨めしげに大天狗を見上げる。

「と、飛べませぬ！」

「当たり前じゃ！ その葉団扇は、おぬしと同じく半人前なのじゃ。まだ一人前の葉団扇として育ってはおらぬ」

## 仲間

翔一は虚脱状態に陥り、ぼんやりと手にした葉団扇を見つめた。

「わたくしと同じ、半人前？」

「そうじゃ、その葉団扇で一人前の天狗と同じように空を飛ぶには、おぬし自身が一人前にならねばならぬ。第一、翔一よ、おぬし太りすぎじゃぞ！ そのようにぶくぶくと太りおって、空を自在に飛ぼうなど、無茶な願いと思わんのか？」

翔一は「ああっ！」と小さく悲鳴に似た声を上げた。大天狗は続けた。

「葉団扇は我ら天狗が空を飛ぶためには必要だが、葉団扇だけの力で空を飛ぶわけではない。背中の羽根の力も必要なのじゃ。じゃが、今のおぬしでは羽根の力も足りん。おぬしに渡した葉団扇はまだ小さいが、おぬしが発奮して懸命になれば、いずれは一人前の葉団扇に育つでろう」

大天狗は時太郎に向き直った。

「時太郎よ、おぬしの仲間に、この翔一を加えてはどうか？ おぬしの、母を訪ねる旅に同行することが、翔一の一人前に育つ旅となるはずじゃ」

時太郎は改めて翔一を見た。

ころころと豚以上に太った身体つき、顔を半分ほど覆うほどの大きな度の強い眼鏡の奥から、不安そうな瞳が見つめ返してくる。

半人前……翔一の言葉を、時太郎は思い返していた。

時太郎は大きく頷いた。

「いいとも！ 仲間になつてくれ、翔一！」  
翔一は弾かれたように顔を上げた。

その目に浮かぶのは希望か、あるいは不安か？



## 野宿

時太郎とお花の後から、烏天狗の翔一は苦楽魔を振り返り振り返り、息をぜえぜえはあはあ切らせながら従ってくる。足下は草鞋わらじである。

なんでも一本歯の下駄は、バランス平衡を取るのが非常に難しく、一人前の天狗にならないと、派手に転こけるばかりで、履けないものなのだそうです。大天狗に渡された小さな葉団扇を大事そうに帯に挟んでいる。

空はとつぷりと夕暮れで、苦楽魔の辺りからは仄かに火明かりが点々と灯っているのが見えるだけになっていた。

必死に従ってくる翔一の足取りは、時太郎が見ても危なっかしい履いているのが草鞋にも関わらず、しょっちゅう躓いたり、ずるつと滑らせたりして、数度となく尻餅をどでつと無様につ搗いて、時太郎とお花に助けられている。

「ねえ、やつぱり、あいつ一緒に連れてきて、大丈夫？」

お花が時太郎に囁いた。時太郎は小さく舌打ちした。

「しかたないよ、もう決まったことだ！」

「でも、あんな調子で、少しは役に立つのかな？」

歩みは翔一の鈍足のせいで、かなり遅れていた。

聞こえないよう小声で話していたのだが、翔一は察していたのだろう。泣き出しそうな顔になって、ぺこりと頭を下げた。

「あいすいませぬ！　このような半人前のわたくしを旅の道連れと

して加えて頂きましたが、これではお二人の足手まといになるばかり……やはり苦楽魔に戻り、別の天狗を呼んできたほうがよさそうに思います」

時太郎は手を振り「よせよ！」と叱った。まったく面倒な奴である。

その内、翔一は見るからに疲れきり、足が縛<sup>もつ</sup>れ、倒れるようにして、へたりこんだ。しかたなく、時太郎は野宿にすることにした。といっても、そこらの平坦な場所の木陰に、ごろ寝するだけのことだ。二人の横に翔一は、筋肉痛がひどいのか、呻き声を上げながら寝ころんだ。

## 星空

空を見上げると、星空が見えてくる。

その星空を見上げた時太郎は、ふと苦楽魔の天儀台と呼ばれた部屋で見た星空を思い出した。

「あの天儀台って部屋の星空は、この星空と同じなのかな？」

「ああ、あの星空はこの惑星から見た星空ではないのです。地球と申す、この惑星から遙か何百秒差距パーセクも遠く離れた場所から見た星空なのだそうです」

翔一の予想外の答に、時太郎は「えーっ？」と顔を上げた。

「そりゃ、どういう意味？」

「わたくしにも良く判りません。ですが、この世界は惑星と申す球体のような世界で、昼間に見るお日様の周りを回っているそうなのです。お日様の周りを一年かけて回り、それが一年の暦となっているのです。天狗はその暦を作成するのが仕事なのです」

「それで、地球ってのは、なんだい？」

「地球とは、光の速さでも何十年も、いや、何百年何千年も掛かるほどの遠くにある世界で、そこからこの惑星に人々が天翔スペースる船シップに乗ってやってきて、現在のような世界を作ったと言われております」

星空を見上げる翔一の口調が楽しげなものに変わった。

「時太郎さん、お花さん。わたくしは、京の都に行くのが楽しみなのですよ。なんでも聞くとここによれば、京の翔遡しやうそ宇院ういんという博物館には、古い記録が途轍もなく沢山の量、残っているそうなのです。わたくしは、そういった古記録を一目、見てみたい！ 古い暦の記

録とか、色んな物があるでしょうね……」

## 御所

京の御所、まわりの公卿の屋敷が桧皮葺ひわだぎきなのに対し、ここだけは燦然と輝く灰青色の瓦葺きの屋根が連なっている。庭には松、梅、桃などの大樹が葉を茂らせ、町屋の喧騒は欠片かけらも届かない静寂が支配している。

高名な庭園家の設計した庭を眺める渡り廊下を、衣冠束帯に身を正した公卿の一人がゆつたりと歩いている。顔にはべつとりと白化粧を塗りたくり、天眉を描き、齒は鉄漿おはくろに黒くしていた。背後には供回りの小者を引き連れ、どこから見ても堂々とした貴族の姿であった。

と、貴族の顔が微かに顰められた。足が止まり、くると背を向け、今やって来たばかりの道を、せかせか戻り始めようとする。

「お待ちあれ！」

廊下を甲高い声が響いた。ついで辺りも憚らない、どすどすという不作法な足音。

萌黄色の烏帽子直衣が目に入る。公卿の眉が顰められた。

「お待ちあれ！ 関白殿！ 拙者でござる。上総ノ介にて候……」

名前を呼ばれ、関白と呼ばれた公卿は立ち止まった。声の方向を振り向いた時には、拭ったように不機嫌な表情は消え、代わりに、滴るような笑顔が貼り付いている。

関白太政大臣、藤原義明である。御所の政争により各地を放浪中、緒方上総ノ介に拾われ、京の政界に返り咲くことができた。いわば

上総ノ介は大恩人であるが、近ごろはなるべく関わらないよう避けている。

しかし宮廷人の常として、決して自分が疎んじているとは露にはしない。

「これは上総ノ介殿……よいお日とおじゃる！」

ほほほ……、と鳥のような笑い声が弾けた。

## 田舎侍

向かい合うのは緒方上総ノ介である。こちらは思い切り険しい表情を隠そうともしない。足を急がしてきたのか、息を弾ませている。上総ノ介の背後には、鼠のような顔つきの供が、やや上目遣いになつて控えていた。

「関白殿！ 拙者、何度も奏上申し上げたはず！ いつになったら【御門】とのご面会が叶うのでござるか？」

上総ノ介の口調は詰問になつていた。

「ああ」と関白は顔を仰向けた。

「その儀でおじやるか！ 麻呂も上総ノ介殿には、非常なる迷惑をお掛けして、心苦しいしだいでおじやるが、中々これがどうして……ま、もう暫くお待ちあれ」

怒りが上総ノ介の顔を赤く染めた。眉を上げ、ぐいと一歩、関白に近づく。思わず関白は「ひっ」と身を竦ませた。

「暫く、暫くと、もう三月になり申す！ なぜ謁見が叶いませぬ？ 理由をお聞かせ頂きたい！」

一瞬、関白の面上に微かに不快な表情が浮かんだが、すぐそれを消し、袂から扇子を取り出して口を覆つて隠した。

「それ、その儀でおじやるよ！ 何しろ、前例がないので……麻呂の同輩も過去の記録を引っくり返して見比べておりますところで、なにか良い前例がないかと……。その内、良いお返事をお耳に入れ

まする。でおじやるから、お待ちをと申し上げておる」

「うぬぬぬ……！」と、上総ノ介は怒りを露にしたが、それでも関白の言葉を拳拳服膺けんけんぷくようするかのよう<sup>けんけんぷくよう</sup>に頷いた。

「とにかく、お頼み申し上げる！」

くるりと背を向け、どすどすと足音を荒げ遠ざかる。後から鼠のような供が、ちょこちょこ小走りに従っていく。

すっかり上総ノ介の姿が視界から消えると、関白は顔を没面にした。

「ふん！ 田舎侍めが！ 【御門】が早々に謁見が叶うと思つてか！」

呟くと、背後の小者を振り返った。

「よいか！ 先ほどの緒方上総ノ介の背後に控えておつた鼠のような面相の小者を覚えておれ。あれは木本藤四郎と言う、素性も定かでない成りあがり者よ。あやつ、上総ノ介の代理としてちよくちよく御所に参内してくるが、麻呂の屋敷に伺候しても決して上げてはならぬぞ。あのような者、目にするのは穢れよ！ わかつたの？」

背後の供は「へへっ」と頷いた。

ふつと息を吐き、関白は廊下から屋根を見上げた。

御所の屋根から【御船】のすらりとした優美な姿が青空に突き刺さるように聳えている。

見上げる関白の顔が綻んだ。

「いくら田舎侍が力んだとしても、この御所と【御門】さまに指一



本、触れることすらできぬ道理よ！」

## 鬱憤

控えの間で、上総ノ介は怒りを抑えかねていた。破槌城であれば、思い切り怒鳴り散らし鬱憤を晴らすところであつたが、御所ではそれも叶わず怒りは沈殿した。

現在、上総ノ介の執着している問題は【御門】への謁見であつた。謁見が実現しなくては、征夷大將軍宣下がうまくいかないことは、京に来て判つたことである。そのため、御所の公卿、および関白を動かしているのだが、進展は一向にはかばかしくない。

上総ノ介の天下統一は目の前に来ている。武力的には、上総ノ介の圧倒であつたが、諸国の領主はそれだけでは畏服しない。全国に号令するためには、征夷大將軍宣下が是非とも必要であり、そのための謁見であつた。

控えの間に木本藤四郎が平伏している。上総ノ介は眦まなじりを決し、きつと藤四郎を睨んで叫んだ。

「鼠っ！ なにか知恵は思いつかぬか？ あの腐れ禰宜ねぎどもを、ずってんどうと、高転びにすっ転ばせる方策じゃ！」

藤四郎はゆつくりと顔を上げた。

「殿……ひと言、申し上げて宜しうございますか？」  
「ん？」

藤四郎の口調に上総ノ介は、怪訝そうに振り向いた。

## 子供の喧嘩

「何かあるのか？」

「知恵……と言うほどではござりませぬが、拙者ふと殿の童わらわのころのことを思い出してござります。殿はお若い頃、周りの者が眉を顰めるほどの悪童でござりましたような」

上総ノ介は「ふっ」と笑った。

「何を言い出すかと思うと、そのような戯たわけたこと……」

「殿は童の頃、近所の子供を引き連れ、合戦じゃと仰せになつては、村単位で喧嘩をなされました。その頃のことを思い出してござります。今の状態は、いわば子供の喧嘩のようなもの……子供の喧嘩の最初は……」

上総ノ介に、うずうずと笑いがこみ上げる。

「そうか！ 子供の喧嘩か！ 鼠っ、そちの言つ通りじゃ。ちと、くそ真面目に考えすぎておつたようじゃ……」

真顔になり、藤四郎に向き直った。

「藤四郎、この京に現在いる直属の士分以上の配下は今、何名じゃ？」

「百名ほどでございましょうか？」というのが、藤四郎の答であつた。

上総ノ介は頷き、どすんと腰を下ろした。

「二輪車揃えじゃ！ 我らの軍事力を大いに公卿どもに見せてやり、

肝を拉ぎ<sup>ひし</sup>させてやろうぞ！ 全員、自慢の二輪車を持って、御所前に集まるよう手配いたせ！」

藤四郎は、ほくほく顔になった。

「きやつらの驚く顔が見えるようでござりまするな。そうじゃ、上様！ 傀儡<sup>くぐつ</sup>も加えてはいかがでござりましょう？」

上総ノ介は「ぱん！」と手を叩いた。

「それじゃ！ 破槌城から傀儡どもも呼び寄せよ！ そうじゃ、確か公卿どもは御所の塀の崩れを修理してほしいと、ほざいておったな、その修理に託<sup>かこつ</sup>けて呼べばよい」

藤四郎はいったん、平伏して立ち上がると、急ぎ準備に立ち上がって控えの間を出て行った。

それを見送り、上総ノ介は空を見上げた。

【御舟】の姿が空を切り裂くように聳えている。見上げる上総ノ介の表情は、不審なものとなっている。

「それにしても、つくづく妙じゃ……。公卿どもら、なぜあのよう  
に頑なな態度をとるのじゃろう？ いったい、【御門】とはなんじ  
や？」

## 信太屋敷

同時刻、信太屋敷。

十数年前、時姫が逃走してからは住む人とてもなく、荒れ果てている。世話する者もなく、庭は雑草が生い茂り、庭木は鬱蒼として茂り、辺りは湿け、じめじめとしていた。

屋敷の塀を、一人の武将姿の男がゆつくりと回っている。木戸甚左衛門である。

真っ赤な皮製の陣羽織、伊賀袴。鮫皮の柄に白に金を施した派手な鞘の太刀を腰に佩き、ゆつたりと歩く傾いた姿は否<sup>かぶ</sup>応なしに人目を引く。

辺りの気配を探っていた甚左衛門は、人目が途絶えたのを確認して、さつと塀の軒に手を掛けた。

次の瞬間、甚左衛門の姿は掻き消えていた。

単に塀の上に飛び上がり、その内側に位置を変えただけなのだが、あまりに素早い動きに、消えたように見えたのだ。

庭を甚左衛門は、ゆつくりと歩き出した。

そう広い屋敷ではない。

もともと信太従三位は陰陽師であり、それほど多くの配下を従えるというような職掌ではない。時折、御所の求めに応じ、卜占の結果を奏上するくらいが役目であり、普段は屋敷に引っ込んでいることが多い。従って、他の公卿との交際もなく、対面を気にする必要もないのだ。

屋敷の雨戸はすべて開け放たれ、雨風にさらされた内部は、埃が積もっている。時姫が出奔してから無住となつた屋敷内のお宝を狙つて、盗賊が何度となく忍び込んだ結果である。

もつとも、狙つたところで、盗賊は奪える物のあまりの少なさに、げんなり幻滅したであらうが。

ふと南天の茂みに隠れている空井戸に甚左衛門の足が止まつた。

井戸には蓋が掛けられている。甚左衛門は小柄を取り出し、南天の茂みを切り払い、蓋を持ち上げた。

## 痣

井戸を覗き込み、にやりと笑う。頬の傷跡が笑いに邪悪な陰を与える。

明らかに抜け道である。時姫はここから屋敷を脱出したのだ。おそらく源二が掘り抜いた抜け穴なのだ。

屋敷内を一巡りし、甚左衛門は濡れ縁に腰かけた。

予想した通り、収穫は全然ない。  
まあ、それは判っていたことである。しかし、まだ手はある。

時姫を発見し、知る辺を伝って御所内部の公卿と接触して引き渡した後は当然のこととして【御門】の面前に謁見が叶うものと思っていた。が、それは当て外れとなった。

誰とも【御門】は謁見しないという朝廷の基本方針を知るのに、時間はかからなかった。なぜか【御門】の周囲には、謎の霧が立ち込めていたのである。

甚左衛門もまた、御所に立ち込めるこの謎に首を捻っていた一人であった。

懐に手をやり、無線行動電話ケータイを手にとる。ぱちりと蓋を開き、画面を見入る。そこには、一人の少年の上半身が映し出されていた。

素っ裸に、ぼさぼさの蓬髪。意志の強そうな顎に、鋭い目付き。  
しかも目元に、はつきりと目立つ痣があった。

河童淵を襲撃したとき、甚左衛門は群れを成した河童の中に少年の姿を見つけ、すかさず無線行動電話の、電子活写機能デジ・カメを使って撮影していた。

後で地元の百姓たちに聞いて回った結果、時太郎という名前も判明した。この時太郎という少年は、自分が河童であると自称しているらしい。

時太郎！ 明らかに時姫の息子である。

目元の痣は、信太一族の特徴であり、甚左衛門は、時姫の父親、信太従三位の目元の痣を見知っていた。



## 目玉

甚左衛門の胸に、山中での出来事が思い起こされた。

炎の中に崩れ落ちる廃寺、胸に槍を受け、絶命する源二。泣き叫ぶ時姫。

道理である時、時姫は自害せず、従容と縛についたはずだ。自分がある時、もしも自害したら、捜査は別の場所に移り、もしかしたら赤ん坊の息子に手が伸びると思ったのだらう。それより大人しく虜囚となり、目を逸らせるほうがましと判断したのだ。

甚左衛門は配下の者を河童淵に潜ませ、少年の動向を探っていた。それによると、数日前、河童淵を出て旅に出たらしい。

となると、時太郎は母親に会いに京を目指すかもしれぬ。いずれは、この信太屋敷に来ることも、大いに考えられた。

それで甚左衛門は、わざわざ出向いて来たのだ。

もう一度そつと懷に手をやる。

取り出したのは、一つの玉である。玉には黒くて光沢のある鼠の尻尾のような物がぐるぐるに巻きついている。甚左衛門は手にした玉に、そつと声を掛けた。

「甚左衛門じゃ。目覚めよ！」

ぴくん、と甚左衛門の手の平で玉が動いた。

びゅるびゅるびゅるっ！ と、巻き付いた尻尾がほどける。尻尾は三本ある。

尻尾は触手でもあるようだ。その三本の触手を使って、玉はぴよんと持ち上がった。

ぐつと甚左衛門の顔の前に玉が持ち上がって、かぱつとばかりに蓋が開くと、そこにぎよろりとした目玉があつた。

これは生き物が機械からくりか？ いや、その中間にある賽博格サイボーグかもしれない。目玉そのものはひどく生々しく、なにやらの獣の目玉を剥り抜いて持ってきたようであり、その目玉を支える三本の触手の光沢は、生き物の感じはしない。

## 命令

甚左衛門は頷き、再び口を開いた。

「わしは、木戸甚左衛門、おぬしの持ち主じゃ。おぬしは、わしの命令だけに従う。それは判っておるな？」

理解したのか、目玉は「うんうんうん！」とばかりに素早く頷く。もしもそれが頷きならば　と、聞き耳を立てるように緊張した様子を見せた。

甚左衛門は無線行動電話を取り出した。画面をよく見せるように翳す。

「この子供の姿が見えたら、わしに知らせよ。この無線行動電話に電子矢文メールを送ってもよし。必ず報せるのだ！　この子供は、必ずこの屋敷に姿を表す！」

目玉は、まじまじと甚左衛門の手にある無線行動電話の画面に見入った。

「直接交信アクセスをするか？」

目玉は三本の触手のうち、一本を甚左衛門の無線行動電話に近づけた。甚左衛門の無線行動電話の差込口に触手が接触し、一瞬の間に大量の二進符号ビットが目玉と無線行動電話の間に遣り取りされる。

「よし、行け！」

甚左衛門の声に、目玉はぴょんと手の平から跳ねて地面に落ちた。

とととと……と、三本の触手を器用に使って庭から正門へ向かうと、柱によじ登り、崩れかけた屋根へと登っていく。

触手をがしつ、とばかりに屋根に突き立て、動かなくなる。目はぱつちりと見開かせ、正門前の道路を見張っている。

それを見た甚左衛門は、満足して立ち上がった。

正門の陰に潜み、人通りが途絶えるのを確認して、悠然と外へ出る。正門屋根の目玉は、遠ざかる甚左衛門の背中をじっと見送っていた。

## 女官

御所の奥深く、大極殿の大屋根の下には誰も知らない空間が広がっている。大極殿そのものは厳しい警護が敷かれ、辻々には検非違使が目を光らせていた。

ひそひそと足音を忍ばせ、そこに藤原義明が通りかかった。顔色はやや青ざめ、明らかに場違いであることを自覚している様子であった。検非違使たちは背中に簞えびら、腰には大刀を提げ、油断無く関白太政大臣の動向を見守っている。

検非違使たちは顔に奇妙な面を被っていた。雅楽の稜王面に似ているが、はるかに非人間的で、どうやらある種の機械でできているらしい。

顔を動かすと、面の双つの目玉がぐりぐりと動いて、かなり気味が悪い。関白はその双つの目玉に見つめられ、思わず立ち竦すくんでいた。

と、廊下の向こうから女官が一人、両手に三宝を掲げ、渡ってくる。それを見て義明は、ほっとしたように肩の力を抜いた。

ちょこちょこと、小走りに女官の前へと近づく。女官の捧げている三宝には、食事の用意がされてあった。

「これ！ その……わしじゃ、関白であるぞ！」

声を掛けられ、女官は立ち止まった。

関白である、という名乗りにも、まるで表情を変えない。魚のような目で、冷やかに関白の顔を見つめている。

「おぬし、もしや、あの娘の係りであるのかの？」

「どの娘のことを仰っておられるのでしょうか？　ここには娘と呼ばれる者は、いくらでもおりますゆえ」

女官の答に関白は苦い顔になった。辺りを見回し、誰も聞き耳を立てていないことを確認して、口を扇子で隠すようにして話しかけた。

「ほれ、時姫とか申す娘よ。いや、今では娘と呼ぶ年頃でもないのかの？　信太従三位の娘、時子という女じゃ！」

女官は、ゆつくりと頷いた。

「はい、わたくし、確かに時子さまのお食事係を承っております」

関白は、ほっと溜息をついた。

## 童子

いつの間にか関白の顔には玉のような汗が浮かび、せっかくの白粉が筋となって流れ落ちて、奇怪な面相を形作っている。

貴族は人前では決して汗を掻くことはしない。という常識からすると、関白のこの様子は、きわめて珍しいことである。

アドレナリン  
副腎交感興奮物質の匂いが、きつく漂う。関白は恐怖を隠せないでいた。

「それで、どうじゃの？ ん？」

「どう、とは？」

女官の反問に、関白は苛々と足踏みをして、両手を戦慄おののかせた。

「時子の様子じゃよ！ 【御門】さまのお機嫌を損ねては、おらんであろうな？」

女官は悠長に首を振った。

「わかりませぬ。【御門】さまのお機嫌斜めならずかどうか、わたくしの知るところではござりませぬゆえ。お知りになりたくば、関白殿ご自身でお確かめになればよろしいではありませんか？」

きらり、と女官の目が光る。関白は「うっ！」と肩を竦めた。

さっと一礼し、女官はその場を離れた。それを見送り、関白はがつくりと頭を垂れた。

そうなのだ、これから関白は【御門】と対面しなくてはならないのだ。それを考えると、途轍もなく気が重い。

いや、重いどころか、込み上げる恐怖と戦うだけで精一杯だ。

大極殿の大屋根を見上げる。

つつん、と袂を引く感触に目を落とすと、そこに一人の童子が立っていた。

髪は角髪みずうりにし、水干を身につけている。首からは勾玉の飾りを下げ、腰には細身の脇差はを佩いている。年齢は十歳前後か、探るような目付きで関白を見上げている。

「関白太政大臣、藤原義明殿でござりまするな？」

童子は、いやに大人っぽい口調で尋ねた。

がくがくと関白は人形のような仕草で頷いた。両目は飛び出んばかりに見開かれている。毛穴が開き、両足は細かく震えていた。

禿かむろだ！

六波羅蜜探題の、童子たちにより構成されている特殊な一団で【御門】直属の監察組織である。この禿たちに目をつけられた公卿は、密かに闇から闇に葬られる運命にあると囁かれている。

「【御門】さまがお待ちかねでございます。お急ぎになれますよう……」

「わ、判つておる！」

関白は屠所に引かれる豚のような足取りで大極殿に向かった。



## 詰問

大極殿の大広間に関白は平伏していた。

ただっ広い広間に、いるのは関白が唯ただいちにん一人きり。磨き上げられた床に、関白は恐ろしさのあまり額を擦り付けたまま、顔を上げることもできないでいる。

……！

空間をある一つの感情が支配していた。それは、激烈な怒りであった。

怒りには、詰問が添えられている。

「そ、それは……麻呂には、とんと判りかねます。なぜ諸国の領主が勝手な振る舞いをするようになったか……麻呂には、まるで見当も……」

……？

はっ、と関白は慌てて額を床に打ち付けた。その勢いで「こん」という乾いた音が響く。「はあ……【御舟】の記録と、翔遡しょうそ院いんとの照らし合わせ作業でございますか？ はっ、そのお……あまりはかばかしくは……申し訳ござりませぬっ！ 急ぎ博士たちを集め、なんとか、ご希望に沿うよう叱咤いたしますゆえ……」

……%\* \$&~ #!

衝撃が、関白の全身を貫いた。

びくつ、と全身を硬直させ、冷たい床に這いつくばる。ひく、ひくと手足を力なく痙攣させた。

「お許しを……お許しを……！」

同じ言葉を何度と無く繰り返す。

床に関白の身体を中心として、薄黄色い染みと鼻を突く悪臭が広がっていく。関白は、失禁していた。

## 関白

ふらふらと上体を浮かせるようにして、関白は御所の廊下を歩いている。歩いている、と言うより彷徨<sup>さまよ</sup>っている、と表現したほうが当たっている。

関白の目は何も見ず、虚ろである。

顔の白化粧はすっかり剥げ、流れた天眉の痕が顔に斑模様を作っていた。失禁したためか、下半身の布地には、べつとりと黄色い染みが不規則模様と化して残っていた。

「関白殿……義明殿……」

遠慮がちな声が掛けられ、関白は立ち止まった。

ひよこひよことした動作で、一人の小柄な公卿が近づいてきた。

公卿の常として、顔は白化粧に染め、鉄漿で歯を黒く染めているのは、関白と同じである。

関白に比べれば、頭一つ分ほど背が低い。関白の体からは失禁の際の悪臭が漂っていたが、気にする様子も一切なく、低い背を精一杯伸び上げらせ、公卿は話しかけた。

「関白殿は【御門】さまに、謁見なされてきたのでおじやろうつで、【御門】は、なんとお話しになられたのかの？」

ぼんやりと関白は、話しかけてきた公卿を見下ろした。

その声を聞きつけたのか、あちこちから同じような衣装を纏った公卿たちが集まってくる。みな、一様に不安そうな表情をしている。

関白は呟いた。

「お怒りじゃ！」

はっ、と公卿たちは身を引いた。

関白は叫んだ。

「お怒りになられておる！ 麻呂は【御門】直々に問い詰められたのじゃ！ それを、なんじゃ……おぬしらは……」

喋っているうち激昂してきたのか、関白の両手がわなわなと震えた。

「麻呂一人じゃぞ……麻呂一人【御門】の詰問に耐え、責めを負い……それなのに……それなのに……！」

「し、しかし、それが関白殿のお役目でおじやるっ？」

「代わってくれと申すのかっ？」

話しかけてきた相手に関白は「きつ」と鋭い視線を投げかけた。相手は、たちまち萎れるように顔を俯かせる。

「代わりを務めてくれるとほざくなら、ただちに麻呂は関白を辞職するわいっ！ さあ、この中で誰か麻呂と代わってくれりよう、奇特な御仁はおじやらぬか？」

誰も答えようとはしない。みな目を逸らし、あるいは俯いている。

「【御門】は、こっおうあげられた……」

関白の言葉に全員、注目した。

「な、なんと？」

「このまま各地の領主の勝手気儘な振る舞いを許すようなら、麻呂らを取って換えるつもりじゃと……つまり麻呂ら公卿全員、お払い箱にするつもりじゃと仰られた！」

ざわざわと公卿たちから私語が漏れた。みな落ち着き無く、顔を見合わせている。

「し、しかしそうなれば誰が麻呂らの代わりをすると云うのじゃろう？」

その声に関白は首を振った。

「【御門】は直々にご自身で御所を動かす、と申されておる……。もし、そのようなことが実現の運びになれば……麻呂らは終わりじゃ！」

よた、よた……と関白は酒精濫用者アルチウのような覚束ない足取りで歩き出す。

「関白殿……どちらへ渡られるつもりじゃ？」

「屋敷へ帰る……」

ぼそり、と関白は答えた。ゆるゆると首を振り、がっくりと肩を落とす。

「麻呂にはもう、何も判らぬ。何もできぬ……屋敷へ帰り、家族の顔でも見ることにするわい……」

公卿たちは言葉もなく、呆然と関白を見送った。

## 関白（後書き）

河童戦記第三部「天狗の章」はこれで結末を迎えます。第四部は「狸の章」です。そう、狸が時太郎たちの旅に現われるのです。さて、狸は、どんな役目をこの物語で負っているのか？ お楽しみに！感想を書き込んでくれたモシモシさん、ひまわりさん、花華さん、カッパっばさん、有難う！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9359n/>

---

河童戦記～天狗の章～

2010年10月12日16時18分発行